「私に出来ること」

交通整理　男性警察官

「言葉にならない」という表現を、よく耳にすることがあるが、想像以上の出来事を目の当たりにしたときに、比喩的に表現する言葉で、小説などでしか使われない表現だと思っていた。

しかし、私が被災地で見た現状というのは、「内陸部に打ち上げられた大型貨物船」「鉄骨しか残っていない建物」「ミニカーのように積み上げられた自動車」「見渡す限りの更地」など、まさに「絶句」するしかない惨状であった。

これが、大震災発生から半年後に被災地に赴いた、私の目に飛び込んできた風景であった。

私が、被災地派遣を命ぜられたのは、９月初旬の頃で、まだまだ残暑厳しい時期であった。

既に、大震災発生から半年も過ぎ、ニュースなどでも取り上げられることが少なくなり、被災地から遠く離れたところに住む私にとっては、大震災が遠い昔の出来事のように感じることさえあった。

私は、第10次特別交通派遣部隊員として、岩手県釜石警察署管内への派遣を命ぜられ、そこで信号が未だ滅灯状態にある交差点での、交差点整理の任務についた。

「信号機が滅灯？」「大震災から半年も過ぎているのに？」

率直な感想であった。

私自身、阪神淡路大震災を警察官として経験し、生田警察署管内において当時交番勤務員として二交替勤務をしながら、被災地における救助活動や治安維持に従事していたが、ライフラインの復旧は比較的早かったような記憶があった。

少なくとも、半年間もの間、信号が滅灯状態であったような記憶はない。

にもかかわらず、未だ電気が通らず、復旧もままならない。なぜだ。

しかし、その答えは、意外にも早くでた。

被災地に赴いた者なら、誰しも感じたかもしれない。

「ここに、人は住んでいるのか？」「ここに、人々は戻ってこれるのか？」

見渡す限りの更地、津波により倒壊した廃墟、警察官として、何をどうすればいいのだろうと。

この惨状を、テレビや新聞を通じてしか知らない人々には、伝わりきれていないのではないか。

そんな事を思いながら交差点整理をし

石巻市内で交通整理する隊員

ていたある日、１台のバスが私の前を過ぎたところで停車した。

しばらくバスを見ていたところ、ランドセルを背負った10歳くらいの女の子が、一人降りてきて私のいる方へ向かってきた。

私が立っていた場所は、元々ガソリンスタンドがあった場所で、今は跡形もなく、唯々更地が広がっている場所である。

正直、被災地に赴いて、初めて子供を見た瞬間であった。

女の子は、私とすれ違いざま、頭をペコリと下げ、何も言葉を交わすことなく通り過ぎていった。

私の前を通り過ぎていく女の子を目で追いながら、私はしばらく呆然としていた。

「こんな幼い子供までもが、大震災を経験し、それでも一生懸命学校に通っているのかと。」

そして、無意識に私は「おかえり」と大声で叫んでいた。

女の子とは、私から30メートルくらい離れていた。

すると、女の子は立ち止まり、私に振り向きながら、手を振ってくれた。

その顔を見ることは出来なかったが、体全体を使って、私に手を振ってくれていたのだけは感じ取れた。

その瞬間、私の疲労は、すべて吹き飛んでしまった。

「警察官でよかった。」「被災地に派遣されてよかった。」と思えた瞬間であった。

最後に、私の大好きな歌で「あの鐘を鳴らすのはあなた」という歌がある。

この歌を耳にすると、被災地で出会った人々、被災地でお世話になった人々の事が頭をよぎる。

釜石市内で交通整理する隊員

「未曽有の大震災で辛い思いや悲しい別れ、苦い体験をされた方々にも、いつかは希望の光が見えてくる。たとえ町が今眠っていようとも、いつか必ず目覚めるときが来る。」

このように聞き取れてしまうのは、私だけだろうか。

この先、被災地がいつ、どのような形で復興していくかは分からないが、私は、被災地に派遣された者の一員として、しっかりと語り継いで行かなければと思う。

一人の警察官として、出来ることは限られているかもしれないが、皆の思いを一つにすることによって、その職務を全うすることが出来るんだと、改めて感じさせられた震災派遣であった。

そして、私は思う。

「あの鐘を鳴らすのは」、私たち警察官一人ひとりでなければならないと。